

市町合併

第15回

新市将来構想 策定委員会を設置

彦根市・豊郷町・甲良町・多賀町合併協議会では、合併後の将来構想案を策定するため、10月11日に「新市将来構想策定委員会」を設置しました。

この委員会は、1市3町が合併した場合のまちづくりの理念や方向性など新市の将来ビジョンを検討して、「新市将来構想案」を策定します。構想案は、合併協議会でつくられる新市の建設計画のもとになるものです。策定委員会は、公募などで選

ばれた合併協議会の委員24人に、有識者として16人の委員を加えた計40人の委員で構成されています。なお、彦根市から策定委員会に参加されている委員は、次の8人の皆さんです。

- （氏名の50音順）
- * 大久保 護子さん
- 小川 良紘さん（彦根市保育協議会会長、るんびにー保育園園長）
- * 北川 貢さん
- * 北川 久雄さん
- 濱口 浩一さん（社彦根青年会議所副理事長）
- * 藤田 益平さん



第2回新市将来構想策定委員会（ひこね市文化プラザで）

- * 安澤 聖子さん
- * 山本 学さん
- （*印は合併協議会委員を兼ねる人です）

住民の視点で議論を

新市将来構想策定委員会は、10月11日と同31日に会議が開催されました。ここでは、今までの会議で協議された内容についてお知らせします。

委員長および副委員長
委員長に小川良紘さん、副委員長に勝間昭一郎さん（京都教育大学名誉教授）を選任しました。

四つの専門部会を設置
新市将来構想案を効率的に調査・検討していくため、教育文

- 化部会 保健福祉部会、産業振興部会、生活基盤部会の四つの部会が設置され、それぞれ10人の委員が各分野別に協議していくことになりました。
- 将来構想案の基本的な考え方
新市将来構想案の策定に当たっては、次のような基本的な考え方が確認されました。
- ① 各市町の総合発展計画を尊重しつつ、1市3町を一つのエリアとして将来のビジョンを考える。
- ② 住民の視点に立って、住民の期待や不安を把握し、構想策定に反映する。
- ③ 1市3町が合併した場合の効果と課題を整理する。
- ④ 新市が目指す将来像はどのようなものか、それを実現するためにどうするべきかを提案する。

住民意向調査の実施

策定委員会では、住民の皆さんが合併に対して持っている期待や不安感、将来のまちづくりへの意向を把握するため、住民意向調査を実施することになりました。市民の皆さんの協力をお願いします。



今後のスケジュール
12月 部会別会議の開催と住民意向調査の実施、第3回策定委員会の開催（住民意向調査報告の取りまとめなど）
1月～2月 部会別会議の開催
3月 第4回策定委員会の開催（新市将来構想案の取りまとめなど）

将来構想の策定に向けて
第2回委員会では、委員から合併事務局に対する質問や、将来構想の策定についての意見が出されました。その一部を紹介します。

（質問）この委員会で策定する将来構想は、目標とする年次をどのくらいと考えればよいのか。
（答え）策定委員会の協議の中で決めていただくことになるが、10年間から20年間くらいを念頭においていただければと考えている。

（質問）この構想案には財政の裏付けが重要であると考えますが、それは考えなくてよいのか。
（答え）財政的なことについては、主に新市の建設計画の中で考えていくことになる。

（質問）合併という一つの区切りにおいて、まちづくりを変える重要なチャンスであり、

第5回
「合併協議会」
日時 12月25日(水)
13:30～
場所 多賀町中央公民館

会議は公開を原則としていますので、傍聴することができます。傍聴希望者は、会議開始15分前までに受付をしてください。ただし、会場は各市町持ち回りのため、会場の規模によって定員が異なります（定員を超えた場合は抽選）。
問い合わせ先 彦根市・豊郷町・甲良町・多賀町合併協議会（市役所4階）☎22-1411（内線429）
FAX22-1398

さまざまなことを議論していきたい。しかし、基本的なことだけだと、どこにでもあるような構想になりがちだ。このまちにしかできないようなこと、新しいまちはこのようにするんだという具体的な案まで策定できるのか。

（答え）皆さんの意見をいただいて、それを新市のまちづくりに活かしていくことが目的であるので、さまざまな新しいアイデアを出していただきたい。将来構想に位置づけられるものについては位置づけていきたいと考えている。

（意見）この委員会の議論で、住民を動かすような感動を与えるもの、ぜひ実現したいというようなものが出せれば大成功である。そのため、委員会で互いに意見交換し、同時にそれが常に住民にも開かれていて、住民からもフィードバックされるといふプロセスをつくってきたい。

（意見）自治体を取り巻くさまざまな状況のなかで合併議論は進んでいる。ただ規模が大きくなっただけで、同じような行政やまちづくりがされるのでは意味がない。この委員会の議論も、地域が「自立する」という考えを大事にして進めていきたい。

このコーナーは、市民の皆さんに市町合併や将来の“まち”について考えていただくために、前号から各町の姿やまちづくりの様子についてそのあらましを紹介しているものです。今回は、甲良町についてです。

“まち”の姿を見てみよう② 甲良町

位置
びわ湖の東部・湖東平野に位置し、東は多賀町、北は彦根市、西は豊郷町、南は秦荘町と接しています。彦根市の中心部まで自動車で約15分の位置にあり、通勤・通学、買い物など日常生活のさまざまな場面において彦根市とは非常に密接なかわりをもっています。町域は、東西5・32km、南北5・15km、面積13・66km²です。

自然
東に鈴鹿山脈の麓に位置する正楽寺山（標高300m）、池寺山（同334m）があり、さらにその山並みは西北方向の西ヶ岡山（同215m）へと連なっています。町の大半を占める平野部は、町の北部を流れる大上川の堆積作用でできたなだらかな傾斜の扇状地で形成されています。

歴史
昭和56年から始められた埋蔵文化財調査の結果、縄文中期には人が住み始め、今日まで約4,500年の歴史があることが分かっています。奈良時代に入ると、本格的な米づくりが始まり、平安時代には条理的な地割りなどが行われ、甲良の荘として拓けていきました。約1,300年前には町の平地部に農村風景が形成されていたものと思われま

甲良町では、洪水と旱魃の繰り返しの歴史を長く経験してきてお

り、何回かの大旱魃に見舞われたことがありますが、水利が整えられた後は、評判の高い甲良米の産地として発展してきました。中世から近世にかけては、京の都に近いこともあって、日本の政治・経済活動と深いかわりをもってきました。特に、甲良三大偉人と称される3人の存在は傑出しています。室町幕府の創立に参与した佐々木道誉（京極道誉）、関ヶ原の戦いとその後の大坂冬の陣・夏の陣における功により伊勢・伊賀32万石の大名となった藤堂高虎、徳川幕府の作事方大棟梁として日光東照宮の造営を司り、甲良大工の名を全国に知らしめた甲良豊後守宗廣。彼らは甲良の地で生まれあるいは暮らし、日本の歴史の表舞台で大活躍しました。

人口
人口は、平成12年の国勢調査では8,169人です。昭和50年代まではわずかながら増加していましたが、同60年を境に人口は減少傾向となつて今日に至っています。

地域文化
甲良町では、町民が自ら手塩にかけてはぐくんできた水環境と農村環境を特色とする「せせらぎ遊園」に愛着と誇りをもち、これを舞台とするまちづくりが進められています。また、町内には数多くの文化財があり、文化財の宝庫であると言つて

も過言ではありません。中でも紅葉と不断桜で知られる西明寺は、千百年の歴史をもつお寺で、本堂や三重塔が国宝に指定されています。また、甲良大工の出生の地にふさわしく、伝統工芸として名高いのが「甲良臼」です。特産の良質のケヤキを使い、一つの臼が完成するまで3～4年が費やされるのが特徴です。職人の技と温もりが感じられ、また、縁起ものとしても人気があり、全国から注文があります。

また、毎年8月21日、北落の吉日神社境内で奉納される「おはな踊り」は国選択無形民俗文化財に選ばれています。踊りの起源は分かりませんが、村人の水への願望とおはなという美女の悲運伝説が、雨乞祈願の踊りになったといわれています。胸に大鼓、背中にほろを着けた若者が勇壮、華麗に舞い、その周りを浴衣を着た子どもと白襦袢を着た大人が踊るもので、雨に恵まれた村人の喜びを表現しています。



西明寺三重塔